

飼料も夏時は山野の雑草を與へ、其の他の時季には野菜の殘片 人の食用に供し得ざる廢物を與ふれば宜しいゆゑ、小農家の副産物として頗る有利なる家畜である。

(完)

君が代

千代萬代と數ふるも

年の始の

あればなりけり

中山忠能

史傳



エドワード、デロング

米

溪

氏より育ち、とは下世話に克く用ふる所、千古の確言、動かすべからず。而も、育つるには、最も幼時に心を用ふるを要す、稚きものの頭は枕の當て様によりても、其の形、變するものと聞けるか、實に染み易き白糸の、一滴の汚も、終生拭ふべからざる痕を止むべきものなるに、紅顔の印象は、聽て、白髪 of 述懐となるものなれば其の育て方こそ、又心せざるべからざるものなるを我が國、從來の様を思へば、之は、誰

も言ひもし、説きもせる所なるが、一体に、禁止の教へ振多くして、煩はしき計りなるも、發展の方面に於て、其の訓へを垂るゝもの少き様なるは如何にや、禁止の辭多ければ、志暢ひ難し、之れ望み多き兒童を育つる道ならんや。まして堂々たる人格を具へて、活動せる社會の表に立たしむべき、二十世紀の人を造るには、心せ得るべけんや、心酔して、擇ふ所を知らざる陋は笑ふべきも、之等の事は、彼の泰西の人々か、家庭に於ける訓育の様を想見せんには、又、資する所、甚多からずやは。

棺の紅葉色褪せて、籬の菊花霜重く、アレガニ
 の山々、最早、頂に雪を翳して、冬は、アトラ
 ンチック斜面の平原を襲ひ、折々空さへ時雨る、
 頃、或日の午后、ニューヨーク、某の街の一大

なる書肆の店頭に立ちたる、年頃十二三にもや、
 眉目も清らなるが、立派と云ふにあらざるも、清
 潔なる身装にて、左も凛々しけに見ゆる一人の兒
 童が、憶する所もなく、店に立ち入りて、帳場を
 構へたる幾人かの番頭の一人に、聲も爽かに問ひ
 ぬ、

「ハリスさん在りや。」

問ひ掛けらるゝまゝ、流石打笑まひて、兒童の様
 子を眺めながら。

「在り。さりながら、今は行へる事在るぞ便なき」
 ハリスとは聽て此の家の主人なり。兒童は主管
 の詞を聞くや、更に、

「若し格別に關はれる事ならずは、願くは予を介
 してよ。」

「左なり。なすべき事われは、予にて辨すべき程

に、別に傳ふる迄もなし。いざ、常に忙はしき主人の、いかで、傳ふればとて、御身等と話す暇あるべき。

彼は老巧、多くの事を處して、商機を察し、牙籌を握て、時を千金と争ふもの、之は、一筋の赤心を推して、己か志を盡さんとあせるもの、推問答の果てざるに。

「ホー何事。」

見上くれば、快活なる面に、一種の愛嬌ある紳士の、笑を含みながら、其の主管の側に立ち寄り

つゝ。

「其の兒童か、何の用ありとや。」

「頻りに貴主に會はんとて、如何に、忙はしき事に關はれる由を話すも、聴かぬになん。

と答へながら、主人の思ひ掛けなくも出て來れ

る様子を見ては、如何に此の場合を處すべきか其の心に思はん程をさへ測り兼ねて、稍、面なげなる模様も見えぬ、主人は、其の方は見も遣らで、親しく、心易げに、兒童に問ひぬ。

「オー、余に求めしとや。而して何事をか話さんとずる。

温かなる心の通ふに、思はず伏し目になりし面を擧ぐる刹那、稍、嘲ける様に見送る主管の視線と、ハタと交はるや、思はず、サト面を染めながら、言葉將た淀みて。

「此に齎らせる請取證、之は曩日―三月以前―書物需めたる折のものなるが、誤れる節あるに、其を正さんとてこそ、君を煩はすなれ。

「好し、諒しぬ、定めし多くを拂ひしならんと、想はるゝかいかに。

「ハーリスの詞も了らぬに、

「否とよ。左ならで、需め得たる書物の、克々考

ふれば、其處に記せる位の高にては、到底需め

得べくもあらず、されは其の不足を補はんとて

こそ、來りぬれ。

事の意外なる驚きて、ハーリスは、暫時、兒童

の隙を見詰むるのみなりしが、聽て、又問ひぬ。

「されは、何時其の誤りを見出し、か。

「家に歸る迄は知らず在りき。折しも、全し級

の誰彼と、川に沿ひて、ボートを浮べつゝ來り

しものから、急ぎ、舟に歸らでは、取り殘され

ては、と思ひ心に煽られて、購ひ得たる書を受

取るや、請取證も見る間なく、其の儘にて歸り

たり。

「さりながら、其を改むるは難からざるに、何と

て早く來らざりしか。

問ふ詞は優しげなるも、音調は自然幾分か改ま

りぬ。

「家は此より若干里の距離ある所に在りて、今日

迄は又、家を離れ難かりしものを。

「愛らしき兒童！純潔なる其の心を聽きては、我

か心も朗かなるを覺ゆるぞかし、多年商界に立

て幾多の人に接せしも、未だ、斯かる場合に遭

遇せず。今日の如く感動せられたることもなし

實にや、其の行こそ、神とも云はめ。いかで、

其の儘にて止むべき、いで報いん

と云ふを遮りて

「報酬？敢て酬を求めん爲には來りしにあらず。

唯我か、正に爲すべき丈けの行をなしぬ、他を

知らざるなり、道を行ふに何の酬かあるべき、

「單た、人たるもの、行ふべき所を行ふを知るのみ。」

「オー請ふ、誰か斯かる貴き、高き教を、教へたるか！」

「母!!!」

聲は濕ひて、ハラ／＼と、小さき袖に抑へ取えぬ涙、答と共に、數行溢れ下りぬ。(未完)

He Who avoids the temptation avoids the Sin

誘惑を避くる者は

罪を避くる者なり。



新年の歌

佐々木信綱

山を越え海を渡りて新玉の

年の使は今いたるらし

新らしき望の光胸にみちて

心のどけき初日影かな

富士のねのみ雪の上に初日さして

年たちにけり大八しま國

冬月 (竹柏園歌會)

井上正直

夕まぐれ落葉集めてたさすてし

烟にくもる三日月の影